

■ 純文学の芥川賞、大衆小説の直木賞

大衆小説は、純文学とジャンル小説の中間に位置している。中間小説とも言われる。中間小説という概念は、わかりにくい。中間とは何なのか、どのあたりを中間と定めるのか、といったことは、簡単に説明できない。けれども、実にわかりやすい基準がある。それは、直木賞である。

直木賞は、設立の当初は、純文学の芥川賞に対して、大衆小説の新人に与えられるものだった。しかしいまでは、実力のある大衆小説作家が増えたために、新人ではなく、有名なベストセラー作家が受賞することが多くなった。芥川賞が、高校野球なのに対し、直木賞はプロ野球の新人王よりもレベルの高いものになっている。

要するに、トップクラスの作家の中から、まだ直木賞を貰っていない人に順番に賞を授けていく、といった感じになっているのだ。ただし、人気も実力もあり、ベストセラーを連発している作家でも、直木賞の候補にもならないということがある。推理小説とか、SFとか、ジャンルに特化した作品は、相手にされない。ここが直木賞のすごいところだ。

純文学と大衆小説(中間小説)には、文章の書き方に差が出てくるのではなく、「わかりやすい文章で時代と人間をとらえる」という点で共通だが、書く側の心構えが少しだけ違う。芥川賞と直木賞と、どちらがほしいか、ということで、盛りソバか、鰻重か、といった程度の違いだと考えていただきたい。

■ 言いたいことをストレートに書くだけでは不十分

リストラされた中高年、がんばって働いているのに出世しないと嘆く女性社員、低賃金にあえぐフリーター、こういった人たちが、自分が体験した理不尽な現実を小説に書いて、世間に訴えたいという、その気持ちはわからないわけではないのだが、ちょっと待っていただきたい。読者はお金を払って楽しみたいのだ。

言いたいことはあるだろうが、それをいきなり主張してはいけない。自分の言いたいことを、ぐっとこらえて、わざと道化ぶったりして読者にサービスするのが、プロの作家だ。

■ 名文とは

名文というものは、華麗な文章ではない。過剰に重々しい文章でもない。センチメンタルになりすぎるのもよくない。そうではなく、正確で、淡々としていて、無味乾燥とさえ感じられるくらいに抑制されいながら、無駄がなく、ごく自然に緊張感がにじみ出ている、じわじわと読者の胸に、何かが起こるといった期待感を抱かせる文章なのだ。

映像には表現できないものとして、匂い(臭い)とか、肌触り、肉体が疲労する感じや、暑さ寒さ、風のそよぎなど、体感と呼ばれるものが挙げられる。心理的な恐怖感というものも、小説の方が描きやすいといえるだろう。

但し、「恐怖」という言葉を使わずに恐怖を描く。これが小説の極意だ。

■ SF、経済小説

ハード SF にしろ経済小説にしろ、書き手には科学や経済の知識が求められる。研究所に勤務していたとか、大学院で学んだとか、知識には自信があるという人の場合は、未来予測に関しては自信をもっているということもあるだろう。そういう人に限って、登場人物が典型的で話も図式的になりがちなので、注意が必要である。